
GALLIAN-CHRONICLES

枕遊戯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GALLIAN - CHRONICLES

【コード】

N6004X

【作者名】

枕遊戯

【あらすじ】

征暦1935年に勃発した第二次ヨーロッパ大戦。故郷が戦火に包まれた時、ウェルキンが寄せ集めの義勇軍を率いて立ち上がった。

失われる生命、受け継がれる想い。戦争の大きなうねりの中で懸命に生きる人間たちの物語。

プロローグ

征暦1935年

ヨーロッパ大陸は東西二つの大国によって分断されていた。すなわち、皇帝を頂点とした先制君主国家“東ヨーロッパ帝国連合”と、王政を廃した共和国国家の連合体“大西洋連邦機構”である。

鉱物資源ラグナイトをめぐり、勢力争いを広げる両国はついに開戦。大陸は戦争の炎に包まれることとなった。第二次ヨーロッパ大戦（E・W・？）の勃発である。

圧倒的な戦力を誇る帝国軍は次々と国境を越え、侵攻を開始。その矛先は連邦のみならず、周辺諸国へも向けられた。

ガリア公国

帝国と連邦の中間に位置し、武装中立を国是とした自然豊かな小国である。しかし、その豊富なラグナイト資源を奪わんとする帝国はガリア公国に宣戦を布告。その領内に怒濤の如く進撃を開始した。

第二次ヨーロッパ大戦のほんの小戦線にすぎないと思われたこの地の戦いで、人々は目撃した。小国が圧倒的な軍事大国を退けた奇跡

的な勝利を。歴史の中に埋もれていた光と影を。勇気と友情、迫害と偏見を。そして、戦火の中に生まれた愛の感動を。

これは7ヶ月にもおよんだその戦いの記録である。

第1章 戦火の出会い

帝国と国境を隔てたブルールの人々は戦火を恐れ、次々と街を脱出しはじめていた。

「落ち着いて行動してください！隣のランドバスターまで行けば、ガリア軍がみなさんを守ってくれます！」

「元気でな！絶対すぐ戻ってこれるからな！」

人々を誘導する自警団の中に1人の女性がいた。

「元気でね、アリシア。これ、ウチで今朝焼いた最後のパンだよ」

アリシアがパンを受け取った。

アリシア「ありがとう、おばさん。手伝えなくてごめんなさい」

「なに言ってるんだい。パン屋より自警団のほうが大事だよ。それにアリシアには旦那が亡くなってからずっと店を支えてもらったからね。アリシアの焼くパンはもう十分マイスターを名乗っていいレベルだよ」

アリシア「…どうか無事で」

「アリシアも。なにかあったら連絡をおくれ」

敬礼をするアリシア。そこに1人の女性が走ってきた。

スージー「アリシアー……っ！」

アリシア「どうしたの、スージー？仕事は？」

スージーが息を整える。

スージー「ス、スパイが……」

アリシア「え！？」

スージー「ダバス橋のところで1人……。まだ若い……」

アリシア「それ、本当！？」

スージー「ジャンさんとミグロさんが残って見張ってくださいませます。まだ気づかれてないと思いますけど……」

アリシア「…スージー、ここはお願いね！」

アリシアはダバス橋へ走っていった。

ダバス橋にて

ジャン「……………」

ミグロ「……………」

アリシア「スパイはどこ!？」

ジャン「……………!!!」

ミグロ「なんだ、アリシアか…」

ジャン「あそこ。今は1人である」

ジャンが指差した先には1人の男がいる。

アリシア「……………」

ゆっくりと男に近づくとアリシアたち。そして、男に銃を向ける。

アリシア「動かないで。ゆっくり両手をあげなさい」

男が両手をあげて、振り向く。

アリシア「見かけない顔ね。名前は？」

ウエルキン「僕の名前はウエルキン。キミたちは？」

アリシア「我々はブルー自警団の者です。あたしの名前はアリシア。スパイがいるという情報を得て、ここまで来たのだけれど…」

ウエルキンの手帳を見つめるアリシア。

ウエルキン「信じてもらえると嬉しいんだけど、僕は単にヒカリマスのスケッチをしていただけで……」
アリシア「魚のスケッチ、ね……。このご時勢に結構ですこと。その話の続きは詰所でゆっくりと聞かせてもらいます。拘束しなさい！」

ジャンとミグロがウエルキンを拘束する。

ウエルキン「はあ、まいったな……」

運命の出会い

詰所へ連れていかれるウエルキン。アリシアはウエルキンの手帳を見ている。

アリシア「魚やお花、虫のスケッチばかり…。あなた、絵が上手なのね」

ウエルキン「だから、ヒカリマスのスケッチをしていただけなんだって…」

アリシア「いえ、これだって新種の暗号かもしれない。じっくり調べさせてもらいます」

ウエルキン「はあ…」

その時、1人の少女がウエルキンを見つける。

イサラ「兄さん！」

ウエルキン「イサラ！元気だったかい？」

ウエルキンに駆け寄るイサラ。

イサラ「兄さん、一体どうしたのですか？」

ウエルキン「ははっ、ちょっとね」

アリシア「…あれ？あなたは確か、ギウンター将軍の…」

イサラ「はい、ギウンターの娘のイサラです」

アリシア「まだ疎開してなかったの？」

イサラ「はい。兄が今日、迎えに来てくれることになっていたんです。その兄というのが…、今そこで拘束されている人です」

アリシア「ええ！？」

ウエルキンの拘束が解かれる。アリシアは申し訳なさそうな顔で手帳を返す。

アリシア「ごめんなさい。メモをとっているのが見えたから、ついスパイと間違えちゃって…」

ウエルキン「いや、客観的に見たら疑われてもおかしくない行為だ」
イサラ「兄は子供の頃から自然が好きで、今は首都の大学で学んでいるんです」

ウエルキン「これからは自分も誰かに観察されているかもしれないってことを、覚えておくよ」

アリシア「ふふっ」

これが後にガリアの英雄と称えられるウエルキンとアリシアの出会いだった。

第2章 コナユキソウの祈り

ウエルキン、アリシア、イサラがブルールの風車塔広場に着いた。

ウエルキン「この風車塔を見ると…、故郷に帰ってきたって気がするなあ」

アリシア「ふふっ、そうだね。親子風車あってこそそのブルールだもんね！」

しばらくしてウエルキンとイサラに敬礼をするアリシア。

アリシア「それじゃあ、あたしはこれで失礼します。帝国軍が近づいているようなので気をつけて」

ウエルキン「うん。アリシアも気をつけて」

手を振り、アリシアが去っていく。それを見送るウエルキンとイサラ。

ウエルキン「さあ、僕たちも帰ろう」

イサラ「はい」

帰郷

ウエルキン「イサラ、疎開の準備は進んでる？」

イサラ「はい。日用品以外の荷造りは済んでいます」

ウエルキン「帝国軍が近づいているようだから、日が暮れる前にはブルールを発とう」

イサラ「はい」

話し込んでいるうちに、ウエルキンとイサラが家に到着した。

イサラ「マーサさん、兄さんが帰ってきました」

家から1人の女性が慌てて出てくる。

マーサ「お帰りなさいませ、ウエルキン坊っちゃん」

ウエルキン「マーサさん、坊っちゃんはないだろう。僕はもう22歳になるんだよ。それに、走ったら危ないよ。もうすぐ赤ちゃんが産まれるんだろう？」

マーサ「走ったってすぐ産まれたりしませんよ。これが5人目なので慣れたもんです」

そこにアリシアとスージーがやって来た。

アリシア「こんにちは。あの…、ウエルキンいますか？」
ウエルキン「あれ、アリシアじゃないか。どうかしたの？」
アリシア「さっきのおわびにと思って…。はい、これどうぞ！」

ウエルキンはアリシアからパンをもらった。

ウエルキン「え…、もらっちゃっていいの？」

アリシア「あたしね、パン屋に住み込みで働いているの。戦争が始まってからはお店は休業中なんだけどね。あたしの手作りだから味は保証するよ。すっごく美味しいんだから」

ウエルキン「ありがとう。えっと、そちらは…？」

マーサ「あら？あなたは確か、エヴァンス家の…？」

スージー「はい。スージー・エヴァンスと申します。あの、このたびは大変ご無礼なことを…」

ウエルキン「え？なんのことだい？」

アリシア「最初にスパイがいるって報告してきたのがスージーなのスージー」も、申し訳ありません！わたくししたら、なんて失礼なことを…」

ウエルキン「いや、いいんだ。まあ、中に入ってよ」

父の面影

ウエルキンはこれまでのいきさつをマーサに話した。

マーサ「…そんなことがあつたんですか？坊っちゃん、大変でしたね。それにしても、かわいいお嬢さんだこと。坊っちゃんもスミにおけませんね？」

ウエルキン「え…？そんなんじゃないよ」

アリシア「そうなんです。それにあたしたち、知り合つたばかりですから。これからお友達になれたらいいなつて思つてます」

マーサ「そうでしたの。坊っちゃんをよろしくお願いしますね」

ウエルキン「おいおい、マーサさん。だから坊っちゃんはないだらう…」

スージーが一枚の写真を見つけた。

スージー「あの壁にかかっているのは…、ギョントー將軍の写真ですか？」

ウエルキン「うん。それは僕が生まれる前の写真だね」

アリシア「立派な…お父さんね。將軍の隣に写つてる方たちは？」

イサラ「右に写つてるのは私の父のテイマーです。父は技師で、將軍の戦車を設計していました」

アリシア「え…、でもイサラさんつて將軍の娘さんじゃあ…？」

イサラ「両親は私を産んですぐに、事故で他界しました。1人残された私を、將軍は養女に迎え入れてくださったのです」

ウエルキン「うん。だから、僕とイサラは血のつながらない兄妹に

なるんだよ」

アリシア「…立ち入ったこと、聞いちゃったかな？」

イサラ「いいえ、気にしないでください。2人とも、私の大切な父ですから」

アリシア「そっか…。そうだよね」

スージー「將軍の左に写ってる方はどなたですか？」

ウエルキン「カンクネン將軍だね。この人も父さんのかけがえのない友人さ。小さい頃、イサラがこの人をえらく気に入ってね。將軍が帰るたびに大泣きされて大変だったよ」

イサラ「…兄さん、それは昔の話です」

イサラが恥ずかしそうに頬を赤く染める。

アリシア「ふふっ、そうなんだ。あっ、もうこんな時間…。あたしたち、そろそろ失礼しますね」

イサラ「兄さん、アリシアさんたちを送ってあげてください。残っている荷物は私たちがまとめておきますから」

ウエルキン「ありがとう。じゃあ、アリシアたちを送ってくるよ」

スージー「ごちそうさまでした。それでは失礼します」

バン！

ウエルキン「……………！！！」

アリシア「今のは…銃声!？」

アリシアが窓から外を覗き込む。

アリシア「いけない、帝国軍だわ。すでに囲まれてる……」
スージー「そんな……」

その時、マーサが座り込んだ。

マーサ「う、う……」
ウエルキン「マーサさん！」

スージーがマーサに駆け寄る。

スージー「いけない！陣痛が始まっています……。今動かすのは危険です」

アリシア「ええ！？ど、どうしよう……。えっと、こっぴう時はまずお湯を沸かして……」

イサラ「アリシアさん、落ち着いてください」

アリシア「……だけど、ここに寝かせておくわけにはいかないよ……」

イサラ「……兄さん、納屋に行きましょう」

ウエルキン「納屋に？」

イサラ「父さんたちが遺してくれたものが、私たちを助けてくれるはずですよ」

父たちが遺したもの

納屋へと移動したウエルキンたち。そこには戦車があった。

ウエルキン「これは…、父さんが乗っていた…」

イサラ「父テイマーが将軍のために一輦だけ製造したエーデルワイ
ス号です」

ウエルキン「だけどこの戦車は…、もう10年以上も動かしていな
いはずじゃあ…」

イサラ「大丈夫です。いつでも動かせるように整備してあります。
私が軍事教練で整備を専攻していたのは…、父のような技師になり
たかったからです」

ウエルキン「整備って、イサラが1人でやったのかい？」

イサラ「基本部分はほとんど手を加えていません。エンジンに新型
のタービンを搭載して、出力重量比の向上を図っております。今の
時代の戦車と比較しても…、水準以上の火力と機動力を発揮できる
はずです」

ウエルキン「父さんの戦車が…動くのか…」

イサラ「兄さんは機甲訓練コースを選択していましたね？」

ウエルキン「ああ…。高校の時、一応ね」

イサラ「マーサさんを戦車に乗せて安全なところに避難しましょう。
戦車は私が運転します。兄さんは指示をお願いします」

エーデルワイス号に乗ったウエルキンたち。

ウエルキン「イサラ、発進の準備はいいか？」

イサラ「エンジン始動。エーデルワイス号、発進準備整いました」
ウエルキン「まずは住民たちを逃がして、風車塔広場を抜けてから
街を脱出しよう。エーデルワイス号、発進！」

ブルール撤退戦

1人の帝国兵が他の兵たちに突撃の合図を送る。その時、エーデルワイス号が納屋を突き破った。

「うわっ！せ、戦車だ！ガリア軍の戦車が出てきたぞ！」

帝国戦車に向かって、全速力で突っ込むエーデルワイス号。

「な、なにをしてる！撃て！」

しかし、帝国戦車はエーデルワイス号の機動力を前に照準を合わせることができない。

イサラ「兄さん、敵戦車を確認しました。対戦車戦闘用意。徹甲弾、装填完了」

ウエルキン「よし、敵戦車を撃破するぞ！」

ドガア！！！！

エーデルワイス号が一輦の帝国戦車を撃破した。

「くっ、総力は我が軍のほうか上だ！一斉にあの戦車を狙え！」

ドガア！！！！

ドガア！！！！

ドガア！！！！

次々と放たれる砲弾をかわすエーデルワイス号。そのまま帝国戦車の横を抜ける。

ウエルキン「イサラ！」

イサラ「旋回します！アリシアさんとスージーさんはマーサさんをしっかりと押さえてください！」

スージー「はい！」

アリシア「任せて！」

エーデルワイス号が旋回し、帝国戦車の後方をとった。

イサラ「兄さん！」

ウエルキン「了解！」

ドガア！！！！

帝国戦車を撃破したエーデルワイス号。敵将はただ呆然としている。

「なんて戦車だ……。一時退却！退却だ！」

帝国軍が退却を開始した。

イサラ「兄さん、帝国軍の退却を確認しました」

アリシア「やった！すごいよ、ウエルキン！」

ウエルキン「ふう、これで少し時間が稼げそうだな」

その時、戦車内に赤ん坊の泣き声が響いた。

スージー「ウエルキンさん！マーサさんの赤ちゃんが生まれました
！」

ウエルキン「ええっ！戦車の中で生まれちゃったのかい！」

スージー「はい！幸い、マーサさんも赤ちゃんも無事です」

ウエルキン「そうか……。よし、敵を警戒しつつ郊外に脱出しよう」

故郷を後に

帝国軍の奇襲を受けたブルールは襲撃から僅か2時間足らずで制圧された。無事郊外へ脱出したウエルキンたちは丘の上から自分たちの故郷を眺めていた。

アリシア「……………」

ウエルキン「アリシア……………」

アリシア「戦争が始まって…、こうなる覚悟はしていたつもりだった。でもね、自分の生まれ育った街が壊されて…、たくさんの人たちが一瞬で死んでしまった…。こんなことが起きるなんて…、今でも信じられない」

涙をぬぐうアリシア。ウエルキンがアリシアの肩に手を置く。

ウエルキン「気ままに生きているように見える鳥や虫たちも、自分の縄張りを持つているんだ。そしてその縄張りを守るために、命がけで戦う習性がある。人間も生き物である以上…、その宿命からは逃れられないのかもしれない。でも、生き物たちは争い合っているように見えて、種族を越えて共存していることもあるんだ」

アリシア「…共存？」

ウエルキン「うん、僕はその共存の仕組みを知りたいんだ。それを知るために、自然科学を学んでいる。その仕組みが分かれば、人間の暮らしに活かせるような気がするんだ。そしていつか教師になれた時、子供たちにそれを教えていくことができたら…、争い自体をなくすことができなくても…、共に手を取り合って生きていけると

思う」
アリシア「ウエルキン…」

そこにイサラとスージーがやって来た。

イサラ「兄さん、マーサさんが眠りについたので、赤ちゃんを預かってきました」

アリシア「わあ、かわいい！」

ウエルキン「戦争の中でも生まれてくる命があるんだね」

ウエルキンが赤ん坊を受け取る。

ウエルキン「ほら…、お前の故郷だよ！」

その時、アリシアがいくつかの種を飛ばした。

スージー「あれは…」

ウエルキン「コナユキノウの種だ。小さいけれど、白くきれいな花を咲かせるんだよ」

アリシア「きつと…、ここに帰ってこようね。コナユキノウの咲くブルールに…」

ウエルキン「ああ…。いつの日か、きつと…」

第3章 第7小隊誕生

中立を国是とするガリア公国では国民皆兵制度と呼ばれる制度が定められていた。

この制度では各教育機関での軍事教練を単位科目として義務付けており、有事の際には一般市民が義勇軍として召集されるのだ。

ウェルキンたちをはじめとするブルールの住民たちはガリア公国の首都ランドグリーズへと避難した。

この戦争を一刻も早く終わらせるため、自分たちになにができるか……。帝国との争いが激化した今、ウェルキンたちは義勇軍に志願した。

召集

ウエルキン「今日からここが僕の部屋か……。出頭する前に着替えておかないとな。よし、準備をするか」

ウエルキンが軍服に着替えた。

ウエルキン「照明弾に双眼鏡……。それにコンパスと地図……。か。作戦行動に必要なものは一通り揃っているな」

その時、部屋がノックされた。

アリシア「ウエルキン、入ってもいい？」

ウエルキン「ああ、どうぞ」

アリシアが部屋に入ってきた。

アリシア「ウエルキンも着替え終わったんだ？ふーん……。うん、よく似合ってる！かっこいいよ。ねえ、あたしはどうか？新しい軍服……。似合ってる？」

ウエルキン「そうだなあ……。うん、よく似合ってる。すごく着慣れている感じがするなあ」

アリシア「……ホントに？無理して言ってない？」

ウエルキン「無理なんかしてないさ。凜々しくて、すごくいいと思う」

ウエルキンの言葉にホッとするアリシア。

アリシア「はあ、よかった…。似合っているかどうか、不安だったんだ」

ウエルキン「特に腰のあたりの装甲とか、甲虫類の外骨格みたいでかっこいいよ」

アリシア「こうちゆうるい…って、虫!? ねえ…、ウエルキン…。虫みたいって言われて、喜ぶ女の子っていると思う?」

ウエルキン「え…、甲虫類だよ? カブトムシだよ? 虫の王者だよ! ? 嬉しくないかなあ」

アリシア「分かったわ…。ウエルキンらしいほめ言葉として素直に受け取っておきますか」

ウエルキン「そういえば、そのスカーフ…。ずっとかぶっているね」
アリシア「ん、これ? パン屋で働いていた時のスカーフなんだ」

ウエルキン「へえ、そうだったんだ」

アリシア「今は軍隊にいるけど、パン屋で頑張った気持ちを忘れたくなくて。また働ける時まで、つけていようって決めたんだ」

ウエルキン「そっかあ…。アリシアがまたパン屋で働き始めたら買いに行くよ」

アリシア「あら、約束よ? 焼き立てのパンをたくさん食べさせてあげるね」

ウエルキン「ああ、約束するよ。よし、準備も終わったし、中隊長のところへ出頭しようか」

隊長任命

中隊長の部屋へ出頭したウエルキンたち。中隊長のエレノア・バロットが志願兵たちに各小隊への配属を言い渡している。

バロット「マツト・コネリー伍長」

コネリー「はい！」

バロット「第3小隊へ配属」

コネリー「はっ！」

バロット「エマー・ワイズ軍曹」

ワイズ「はい！」

バロット「同じく第3小隊へ」

ワイズ「はっ！」

バロット「…ウエルキン・ギウンター少尉」

ウエルキン「はい！」

ギウンターと聞き、周りの志願兵がざわめく。

「ギウンター!？」

「ギウンターって、あの…?」

一呼吸おいて、バロットが口を開く。

バロット「本日付けで誕生する第7小隊の隊長に任命する」

アリシア「え？」

ウエルキン「……………」

バーロット「どうした、不服か？」

ウエルキン「いえ……」

バーロット「当然のことだ。高校では機甲訓練、大学では幹部候補
教員課程を履修済み。その上、貴官はあのガリアの英雄、ギユンタ
ー將軍の息子なのだから」

ウエルキン「しかしバーロット大尉、僕には実戦経験がありません。
それをいきなり小隊長というのは……」

バーロット「ブルー撤退戦での活躍は聞いている。貴官にはすで
に実戦経験があると我々は考えている」

ウエルキン「でしたら、一つお願いがあります」

バーロット「なんだ、言ってみろ」

ウエルキン「ブルーより持参した戦闘車輛の使用許可をいただけ
ないでしょうか？」

バーロット「戦闘車輛？」

ウエルキン「あの車輛には癖がありまして、メンテナンスを行える
者がごく限られています。ですので……」

机の上にある資料を確認するバーロット。

バーロット（なるほど、そういうことか）

ウエルキン「……………」

バーロット「いいでしょう。イサラ・ギユンター伍長」

イサラ「はい！」

バーロット「第7小隊に配属します」

イサラ「はっ！」

ウエルキン「ありがとうございます」

バロット「ギウンター少尉、あなたは今後、いろいろな意味で注目を集めることになるでしょう。戦果を期待します！」

ウエルキン「はっ！」

バロット「アリシア・メルキオット軍曹」

アリシア「はい！」

バロット「第7小隊、ギウンター少尉付きの下士官として、彼の補佐を任せます」

アリシア「はっ！」

配属命令が終わり、解散となった志願兵たち。ウエルキン、アリシア、イサラ、スージーは同じ第7小隊に配属となった。

アリシア「みんな同じ隊になれてよかったね」

ウエルキン「ああ、そうだね。これからもよろしく頼むよ」

ファルディオ「ウエルキン・ギウンター少尉！」

背後から声。端正な顔立ちをした男が近づいてくる。

ファルディオ「よう！久しぶりだな、ウエルキン！」

ウエルキン「ファルディオ！ファルディオじゃないか！」

友との再会

食堂へ移動したウエルキンたち。ファルディオがコーヒーを一口飲み、口を開く。

ファルディオ「やあ、久しぶりだね、イサラ」

イサラ「はい。ファルディオさんもお元気そうで」

ウエルキン「そうかあ…。ファルディオはもう義勇軍にいたんだ」

ファルディオ「ああ、オレは第1小隊の隊長だ」

ウエルキン「正規軍には行かなかったんだね」

ファルディオ「まあな…」

スージー「…それで、ウエルキンさんとはどういうご関係なのですか？」

ウエルキン「大学の同級生さ」

ファルディオ「ウエルキンは生物学、オレは考古学を専攻していた」

アリシア「専攻が違うのに仲がいいんですね」

ファルディオ「うん、なんて言うんだろうなあ。強いて言えば…、変人同士が惹かれ合ったとも言うのかな？」

ウエルキン「うん、そうかもしれないね！」

アリシア「ふふふつ、なんとなく分かるなあ。ウエルキンの友達って、なにかしらおかしな人のような気がするもの」

ファルディオ「なら、キミたちも変人の仲間入りってことになるな」
アリシア「もう！女の子に向かって、それはないでしょう！」

一斉に笑うウエルキンたち。するとファルディオが真面目な顔で尋ねる。

ファルディオ「でも驚いたよ、ウエルキン。まさかお前がこんなに早く義勇軍に参加するとはな。あれだけ争うことを嫌っていたお前がなぜなんだ？」

ウエルキン「なぜって…、国民皆兵制度に例外はないだろう？」

ファルディオ「嘘だな。兵役を逃れる方法なんていくらでもあるし、国外へ逃げることもだってできたはずだ」

ウエルキン「…ブルールが占領された時、僕も街にいたんだ。人が死んでいく姿を見た時に…、破壊された街を…、壊された風車を目の当たりにした時に思ったんだ。この戦争を一刻も早く終わらせなければいけない…。もう一度あの場所に戻るためには…、僕も戦わないといけないんだって」

アリシア「ウエルキン…」

ファルディオ「そうか…」

ファルディオが立ち上がった。そして、ウエルキンに手を差し出す。

ファルディオ「ようこそ、義勇軍へ。これからはオレとお前は戦友だ！」

ウエルキンも立ち上がり、その手を力強く握る。

ウエルキン「ああ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6004x/>

GALLIAN-CHRONICLES

2011年10月21日03時06分発行